

金沢地方法務局長賞

私のコンプレックス

珠洲市立緑丘中学校三年

林 知 佳

私が母のおなかから生まれてからずっと、みんなと少し違うところがあります。

私の人差し指は、第二関節までしかなく、したがってみんなの指の半分しかないので、とても私の指は短いのです。それに、骨が変形しているの指はとても太く、私の手は親指が二本あるかのように見えます。

私は、保育所・小学校と上がり、まったく自分の指を気にせずに元気に通っていました。

ところが、三年生ぐらいになると人とは違う指をしているところが気になり始め、私はあまり人に気づかれないように、そっと自分の手をかくすようになりました。

そのころから、私は父と母に毎日のように、「どうして私だけがこんな指なが!!」「私がこんな指しとるから、私のこときらいねんろ」など、たくさんの言葉をあびせていました。そして、自分の部屋に閉じこもり、毎日のように泣きました。

しかし、学校のみみんなや同級生のみみんなに、私が指のことを気にして毎日泣いているの気づかれなくなかったので、学校に行くといつも元気でいるようにしていました。

こんな生活を半年近く続け、私が四年生になったころのことです。学校が、ほかの学校と合併し、私の学年は新しい仲間を三人迎えることになりました。私はその中の女の子二人と、とても仲良くなり、自分のコンプレックスにしていた指も気にならなくなり、心から学校を楽しむようになりました。

私達が十歳になったころ、「二分の一成人式」を企画しました。それは、二十歳になるまでの間の十歳になった自分達が、二十歳になった自分に手紙を書いて、二十歳になったらまたみんなが集まって、手紙を読もうといった計画でした。本当は、ここで終わるはずだったのですが、先生からのサプライズで、先生が母達にお願いをされていて、こっそり私達あての手紙を書いてくれていたのです。先生が一人ずつに手紙を配り、私の所にも一通の手紙が渡され、ゆっくり手紙を読みました。

手紙には、「生まれてきてくれてありがとう、みんなと同じように産んでやれなくてごめんね。」といったことが書いてあり、最後に「あなたのことを世界で一番愛している母より。」と書いてありました。私にとってこの言葉が、どんな言葉よりもうれしくて、以前半年近くに渡って言った言葉を悔やみました。それからは、母達にあたることがなくなりました。

私が五年生になったころ、押し入れを掃除していると、一冊の古いノートが出てきました。そのノートには、私が知らなかったことがたくさん書いてありました。

私の指は、父からの遺伝であり、私が産まれて父と私の初めての対面のときに、父は私の指を見て自分のせいだと、とても自分を責めていたことが書いてありました。また、父は私をすぐに金沢の大きな大学病院につれて行き、いろんな検査をしたそうです。しかし、私の指は骨をけずって細くすることができても、長さを変えることはできないということがわかりました。また、足の親指は成長するにしたがってだんだん曲がっていくということで、ある程度足が大きくなったら手術して、まっすぐにしなければ私の足にとってあまりよくないこともわかりました。

最初はいやでたまらなかった指も、お母さんからの手紙や古いノートのおかげで、お母さん達がどれだけ私を大切に思ってくれているか、どれだけ愛してくれているのかわかったので、全然気にすることがなくなりました。

また、神様が私に人の心の痛みがわかる人になるために、私にもそういった障害をあたえたんだと、考えるようになりました。指のコンプレックスがあることで、傷ついている人の気持ちがわかることができ、一緒に考えてあげられるようになりました。そう思うと、私は前よりも心が強くなったと思います。

たまに、人に指のことで「どうしたの？」と、とても悲しそうな目で聞かれたときは、「ドキッ」とするけれど、私は笑顔で「生まれつきです。」と答えられるようになりました。

最初は神様をうらみましたが、いまでは私のことを大切に思ってくれている父と母の子供でいさせてくれていることに感謝しています。